

私のふるさと



私のふるさと「難波の思い出」

菊川 年明

子供の頃は「ふるさと」といえば山や川があり、田んぼがあり、小川にはメダカやドジョウがいたり、というイメージでした。これはいろいろの歌謡、童謡、物語などから自然に形成されたものだと思います。ふるさとはこのようなものだと思いますので、大阪の市内で生まれ、育った自分にはふるさとはないと思っていました。

しかし、成人して、国家公務員の道を選びましたから転勤は常態でした。最初の転勤先は昭和30年代後半の東京でしたので、大阪を離れてみると大阪もふるさとだと思えるようになりました。

私の生まれたところは、大阪でも旧市内ではなく、明治以降に開けたところでした。今にして思えば不思議な街でした。近所は長屋の連なるところでしたが、4戸が1棟の長屋の1軒に「お寺」と呼んでいる家がありました。

間口は2間半くらい、正面の出入り口は1間半くらいの引き戸になっている2階建ての家で、1階は「本堂」と名付けて、簡素ながらお寺ふうに正面に仏様が祭られ、両側には風神、雷神の大きな絵がありました。一家は2階に住んでいました。2階のひさしに小振りの半鐘くらいの鐘が吊り下げられていましたが、これはお寺の象徴の釣鐘だったのだらうと思います。主人は僧侶で、毎日、いわゆる「お参り」に出かけていました。私の家も毎月1回来ていただいていたました。

主人はときどき、近所の子供たちを本堂に集めて、教育紙芝居の会を開いていました。太平洋戦争中の、楽しみの少ない時期でしたから、8畳敷きくらいの本堂の畳の間は子供たちで満員でした。

その隣には石職人が住んでいました。家の前に墓石用と思われる石材を数個積んでありました。主人は雨天でなければいつも家の前の空地で、石材にのみを振るっていました。近所では「石屋さん」と呼んでいましたが名字は「石井」でした。

仕事中の家の前は、御影石のかけらだらけでしたから、近所の子供らはその石を拾って、石蹴りという遊びをしていました。

この空地には紙芝居屋が毎日、ほぼ定時にやって来て、拍子木を打ってその辺を回り、子供たちを集めて「黄金バット」など、3本立ての紙芝居をやっていました。

棟の違う長屋に「看板屋」という家がありました。映画の看板屋さんで、映画館の正面を飾るものです。ベレー帽をかぶり、絵描きさんふうのスタイルをした主人が、左手に映画のステール写真を持ち、それにときどき目を向けながら、右手に絵筆を持って、当時人気の長谷川一夫や上原謙などの顔や姿を大きな板に描いていました。

私がまだ幼稚園くらいの頃、近くの道路下に地下鉄を作る工事が行われていました。大阪市営地下鉄の難波～天王寺間の延伸工事でした。この頃は露天掘りでした。昔は海だったというところだったので、地面の下は貝殻混じりの砂だけで、掘り出した砂は付近の空地に積み上げられ、2階建ての家の大屋根くらいの高さの山になっていました。付近の人は砂山と呼び、子供たちは砂を掘って珍しい貝殻を探したり、大きな竹籠をソリにして滑り降りたりと、いろいろに遊んでいました。

また、この一角は、夏にはギンヤンマの通り道になっていて、夕方、ねぐらへ帰るヤンマが西の方から来て東の方へ、少し高めのところを飛んで行きました。日没までの1時間ほどですが、おびただしい数でした。このヤンマを「ぶり」という手作りの道具で捕えることに夢中になりました。

「ぶり」というのは、長さ60cmくらいの糸の両端に、小粒の石(直径約5mm)を、ろう紙(キャラメル)の包み紙でもよいなどでもくるんで結びつけたものです。この道具をヤンマめがけて放り上げると、ヤンマは餌と間違えて食いつきにきて、糸に絡まって落ちてくる、という仕掛けでした。当時、この辺りの西の方にはヤンマが終日過ごせるような環境のところがあったようです。

ヤンマが昼間を過ごす辺りの少し西には汽船が入れる大きな川の河口があり、ときどき航行する汽船の「ボー」という汽笛が聞こえていました。